

あゆみ通信

VOL. 162

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

報恩講



コロナコロナで騒いでいたら、気が付けば報恩講の季節を迎えます。1年があつという間に過ぎた感があります(事務局)

「真宗門徒の一年は、報恩講に始まり、報恩講で終わると言われます。それほど、生活の中で重みをもってきた仏事が報恩講ですが、現在の報恩講はどうなっているのでしょうか。真宗寺院に本当の活気が生まれ、熱のあるお寺になっていく道は報恩講と言う仏事の回復しかありません。それが無ければ真宗寺院は真宗の本来性を失い、世俗の価値観の中に埋没していくしかありません。(中略)

真宗の寺院は親鸞聖人のお寺です。親鸞聖人の教えを受けてきた方々が、念仏の道場としてのお寺を建立してこられました。その伝統の中で親鸞聖人の報恩講が勤められ、代々にわたって相続されているのです。(中略)

親鸞聖人の言葉は、私たちのお釈迦様の本当の心を表現して下さいといっているでしょう。つまり、仏教と言う言葉の本質、仏教とは何かと言うことを改めて示してくださっているのです。そしてその仏教とは、私のためにある、広く言えば人間のためにあるのです」(海法龍「報恩の生活」東本願寺出版より)

第2組報恩講案内

第2組では、従来から合同の報恩講を勤めています。

コロナ感染拡大の現在ですが、感染対策を厳しく行いながら、萎縮せずに聞法を勤めたいと思っています。体調の不安な方は、ご無理されませんように。

日時 11月9日(水) 14:00

会場 即應寺(阿倍野区阪南町)

内容 お勤めと法話、同朋総会

講師 土井紀明先生

(第8組 念佛寺住職)

参加費 500円

その他 時節柄、いつものお斎を頂いての催しはございません。

第2組門徒会と合同研修会開催



2022年9月6日(火) 午後1時30分から、天王寺区の光照寺(墨林浩住職)をお借りして、大阪でのコロナウイルス高止まりの中を、第2組門徒会とあゆみの会合同研修会に、10名が参加いただき開催されました。

真宗宗歌斉唱の後、門徒会中嶋ひろみ会長の挨拶があり、引き続いてご法話に移りました。ご講師は松井聡先生(門真市心願寺)、講題は「南無阿弥陀仏一人として生まれた意味をたずねよう」で、来年御本山で厳修される



「宗祖親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法(2面へ)

親鸞のことば

心の善し悪しを問わない、念仏の教え

わがこころよければ往生すべしとおもうべからず。自力の御はからいにては真実の報土へうまるべからざるなり。(親鸞聖人血脈文集)

人に親切にすることは好ましいことです。しかし親切にした時「自分もまんざらではない」と思いあがったり、「私にも親切にして欲しい」と要求する気持ちが起こってしまうものです。人間の行いはどうしてもそのような毒(煩惱)が混じっている、そう親鸞は言います。ですから「わがこころがよい」と言うことはなく「わがこころは悪い」のです。しかしまた親鸞は「わがこころが悪いから往生できないと思ってはならない」とも言います。往生に心の善し悪しは無関係であるとされ、阿弥陀さまが与えてくださった念仏によって往生するのです。

またこの一節の「自力のはからいでは真実の浄土には生まれることができない」とは、自力のはからいで生まれるのは仮の浄土であり、そこにおいて自力の人々は阿弥陀さまによって真実の浄土に生まれる者に育てられていくのだと言うことです。阿弥陀さまの「人々を決して見捨てない慈悲の心」に触れて救われたからの言葉です。

(名古屋別院「人生を照らす親鸞の言葉」より)

また、歩み始めます

皆さんにご迷惑をおかけしましたが、入院、右膝の人工関節置換手術、そしてリハビリと貴重な体験をして、退院しました。家に帰りお内仏の前でお勤めをして報告、やっとです。まだ、足腰が完全ではありませんが、3か月何とかリハビリを続けながら、少しずつ伸ばしていけたらと思います。

一日でも早く回復して聞法会で皆さんと会えることを楽しみにリハビリで専念です。

あらためて、初心不忘 お皆さんと共に聞法できる喜びをみしめて、「あゆみ通信」続けます。合掌。(本)

(1面より) 要のテーマです。

はじめに、立教開宗について、宗祖は一宗派を独立する意図はなく「浄土真宗」と言う言葉を浄土の真宗を宗とする教えと言う意味で、『教行信証』の中でお使いになられたと。

清澤満之師のお言葉「自己とは何ぞや、これ人生の根本問題なり」を紹介され、何のために生きているのかと人間だけが問う。人が人生に不安を感じたり、空虚感を覚えたりするのは、真実なるものを求めているからであると。親鸞聖人のお言葉「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごと、たわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」(「歎異抄」後序)を引かれ、念仏だけがまこと(真実)であると。

お念仏は、私が仏を念じると同時に、仏が私を念じてくださっていると言うことが分れば、お願いの念仏が、智慧や慈悲に対する感謝の念仏に変わる。『正信偈』に、「摂取の心光、常に照護したまう」とある。心光とは、心の中で光ってくださる。私の闇が照らされいろいろ気付かされて行く。それがお念仏の働きであると。

善導大師の六字釈では、「南無と言うは、



すなわちこれ帰命なり、またこれ、発願回向の義なり。阿弥陀仏と言うは、すなわちこれ、その行なり」と。気付かせようとして下さっているのは阿弥陀仏が働いてくださっているのであると。

最後に、人間に生まれたから仏法を聞くのではなく、仏法を聞くために人間に生まれて来たのであると話してくださいました。

(レポート: 細川克彦 (佛足寺))

第2組間法会 決行

2022年
8月27日
(土) 午後2時から、光照寺(墨林浩住職)



を会場に、残暑厳しい中でしたが、今年度第5回となる第2組間法会が、組内の住職や寺族、そして門徒、推進員21名が参加して開催されました。

講師は広瀬俊先生(第17組法観寺)で、講題「円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す」(「教行信証」総序の文より)でした。

先生ははじめに、親鸞聖人のお弟子の明法房(山伏弁円)の回心について話されました。

弁円は、親鸞聖人の布教により、庶民の心が自分たちの祈禱から離れていくのを怒り、殺害しようと草庵まで来た時、親鸞聖人に会い、たちまち武器を捨てて弟子になったと。

先生は、弁円は親鸞聖人が妻や子どもたちと共に生活しているのを知り、そこにいのちのつながりを見、自らもいのちのつながりの中にあることに気づき、自分の思い通りにするために親鸞聖人を殺そうとした自分を深く懺悔してのことではなかったかと。

先生は小学生たちの作文を引かれ、いのちのつながりを自覚するところこそ、都合の悪いことがあっても、南無阿弥陀仏に出会うことを通して、悪心も翻され、いのちに帰るのではないかと、他にもいろいろ引用され、やさしく話してくださいました。

(レポート: 細川克彦 (佛足寺))

第2組間法会 (7/23) 新田修巳師の法話から 細川 克彦 (佛足寺)

今回はこれまでに先生が出遇われ、教えを受けられた先生方のお言葉を紹介してくださいました。

20歳を越えた頃、松原祐善先

生は授業で黒板に「大空阿弥陀を拝まむ 月今宵」という作者不詳の俳句を書かれた。その時何でこういう俳句を書かれたのか分からなかったが、生老病死の人生はどうしてみようもない、ただ頭が下がるのみであることをおっしゃるとされたのではないかと、今になって気付かされると。



松原先生はまた「業(=生老病死)を受けて、業を悩む、そしてさらに業を尽くしていく、そこに真に生産的な人生の創造がある」と、常に言われたと。



また、1975年正月に松原先生からいただいた年賀状を紹介され「今年も日々新しく希望に満ちた良き年をお迎えください。

それはただ「純粋未来からのみ招来されてくるのです。年を重ねていよいよはっきりすることは、“光は浄土から”という一事だけは真実です」と。

また24歳頃のこと、先生は仏法に喜びを感じつつも、それでよいのかと言う疑問が起こり、安田理深先生のお宅を訪ねられたことがあったが、その時、安田先生から「もっと悩まなければなりません。人類の様々な問題が私たちに押しかかっているのです。安っぽい喜びや安心を打ち破っていくのが浄土真宗です」と言われ、居眠りを続けていたと気付かされた。その時から菩薩の人間と言う言葉が自分に響いたと。

休憩後は、信國淳先生のお言葉「称名念仏とは如來自身を自己贈与して下さっているということ」を教えていただいたと。

また、竹中智秀先生はその講義の中で「南無阿弥陀仏は称える念仏でもあり、聞こえる念仏でもある。南無阿弥陀仏をまず身につけることから始めていけばよいのです」と教えてくださっていると。心に残っている先生方のお言葉を共有してもらえたらと、お話を終えられた。

--	--	--